

「宝瓶御影」の図像成立に関する覚書

はじめに

植村 拓哉

佛敎大学宗教文化ミュージアムでは、平成二十六年度春期特別展として「法然上人の御影―お姿とものごたり―」〔図1〕（以下、御影展とする）を開催した^①。これは佛敎大学の附置機関である大学博物館として、新入学生や初学者に対して本学の建学理念を学ぶ一助となるように、その一端について資料を通して理解を促すことを目的として企画された教育的展示である。

法然上人（以下、敬称を略し法然とする）は一宗の祖師としては極めて多様な系統の御影が制作された人物であり、その御影には、それぞれ生涯の事績や人柄を伝える豊かなエピソードが内包されている。近世以降に地方に伝わる伝承をもとに様々に描かれ伝えられてきた作例も数多いものの、それも全ての衆生が救われる道を模索し、生涯をかけて専修念仏を説いた法然自身が、永らく宗徒に尊崇されてきた素地があるからこそ生まれ得たものであると考えられた^②。さらに、例えば法然御影のなかでも、「鏡御影」のように比較的成立が早いと考えられる既



図1 「法然上人の御影
—お姿とおものがたり—」展

景にある逸話をあわせて紹介すること、より近しく法然の人柄などについて知っていたからこそ考えた。

そして法然御影のなかでも極めて特徴的な画像を示す「宝瓶御影」を眺めているうちに、その図様成立の背景には、浄土宗元祖としての法然の聖性を強調するために、既存の御影を意図的に選択し形成された可能性が高いと考えるに至った。本稿では、御影展を企画するなかで気付かれた問題の中で、浄土宗における祖師信仰のなかで、御影に期待された機能という点にも留意しながら「宝瓶御影」を取り上げ、その図像成立に関して考察を加えてみたい。

第一章 法然御影の系統について

冒頭でも触れたように、法然は一宗の祖師としては極めて多数の御影の系統が生成されてきた人物である。法

存の系統の御影に関しても、背景的な伝承が反映されていた特徴的な図様が時代を経ることで失われていく、あるいは極端な誇張が行われるなどの変化が起りうることで見て取れた。そのような点にも着目しながら、御影展では近世に至るまで新たな系譜が創出されてきたと考えられる法然御影のなかでも成立が早いと考えられる「足曳御影」「鏡御影」「頭光踏蓮御影」「宝瓶御影」「二祖対面御影」「隆信御影」「信実御影」の七系統を取り上げ、法然のお姿と関連資料によってその背

然御影については、古くは井川定慶、望月信成両氏などによる研究に詳しく、^③ 成田俊治氏によって近世に至るまで様々な伝承をもとに描かれ続けてきたことが明らかにされ、その多様性や、図様の形式的系統の整理について詳しくまとめられ論じられている。^④ 近年では総本山知恩院を中心として、法然上人八〇〇年大遠忌に関する事業成果によって個々の作品の調査研究が行われ、高間由佳里氏による光学的手法を取り入れた研究も進んでおり、^⑤ 法然の御影研究は活発の様相を呈している。^⑥

法然御影は、「善信聖人絵(琳阿本)」巻上第四段「図2」において法然から親鸞へ『選択本願念仏集』と法然御影を与える場面や、「信実御影」(知恩院蔵)のように『法然上人行状絵図』巻四十八第三段「図3」で空阿弥陀仏が藤原信実に御影を描かせ本尊として祀っていたことなどを伝えるように、法然の生前から制作され、弟子それぞれに与えていた、あるいは子弟が求めた可能性がある。^⑦ さらに、没以降も生涯の事績や地方に伝承される数々の逸話などをもとに、近代に至るまで様々な系統が創出され信仰されてきた。

そのような多数の御影には、法然伝として御影が描かれた時の逸話を伝える生前に描かれた寿像か、没後に伝承をもとに制作されたものの二種に大別されてきた。さらに、背景にある逸話から分類すると、法然の人間性や、宗徒に対する厚情を伝える、人間としての法然と、尊い存在であることを表現した、聖人としての法然の二種にも分類する事が可能と私考する。例えば、前者は「足曳御影」や「鏡御影」など、宗徒との意外なほどの温かみや微笑ましい逸話を内包するものがあたり、後者は「頭光踏蓮御影」や「宝瓶御影」など法然の聖性を頭光や宝瓶といった図像的象徴によって表現するものが挙げられるだろう。このような視点は、実作例の遺存から法然御影の制作が極めて増加していく室町時代以降の浄土宗史を照らして祖師信仰について検討する際に特に有効となるものと考えている。

さて、そのような法然御影のなかでも二尊院に伝来する「足曳御影」〔図4〕は十三世紀頃の制作と考えられており、現存最古級と考えられている作例である。現存する多くの作例において、法然御影の定型を表す図様が「足曳御影」に倣うと考えられる点は注目される。

ここでいう「法然御影の定型」とは、頭部を右に向け顎をひき、墨染の衣を著し胸前で数珠を繰り、上畳に坐す姿を指し、現存する多数の法然御影に図様が参照されている事がわかる。例えば、「鏡御影」〔隆信御影〕〔図5〕などが挙げられようか。特に「鏡御影」は金戒光明寺本〔図6〕を古い写しとして、伝名称を持つ極めて多くの遺例が伝来している。そのような点を考え合わせると、定型を示す最古例としての「足曳御影」の存在意義の高さが窺われる。

しかし、この定型から外れる図様系統も見受けられ、「信実御影」〔図7〕のように左向きに表されるものや、本稿で問題とする「宝瓶御影」のように立像形式の系統も存在する。このような定型とされる系統以外の図様の成立背景については、これまで留意されてこなかったと考えられる。

この定型に倣うとされてきた作例についても、その成立がいずれの系統に帰属するかについては問題がのこされている。それは現在確認される遺例のほとんどが写しと考えられ、原本が失われていると考えられることから明快な解決が得られるものではない。しかし、「鏡御影」についていえば、知恩院本『法然上人行状絵図』巻八第七段に記されるような、いわゆる「法然頭」誕生説話による図様形成が行われたと理解され、極めて多くの「鏡御影」系統の遺例が伝承されている。それは基本的に「足曳御影」と同じ図様を示しており、「足曳御影」の左下部に認められる風呂敷包みが無い点で明確に系統が異なると理解されている。「鏡御影」が広く流布し、模本が数多く制作されてきたのに対し、「足曳御影」の模本が管見の限りでは見当たらないのも興味深い事例とい

「宝瓶御影」の図像成立に関する覚書

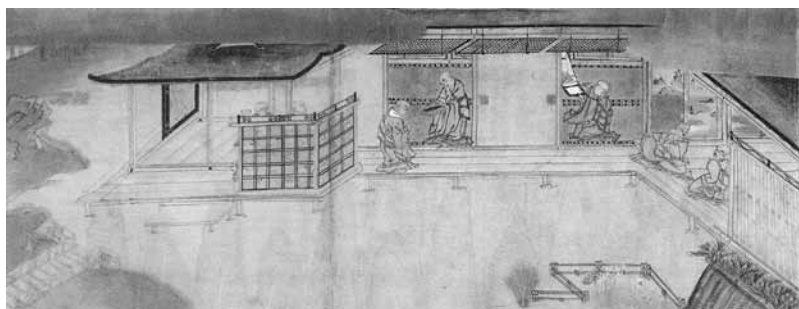


図2 『善信聖人絵』 巻上第四段 西本願寺

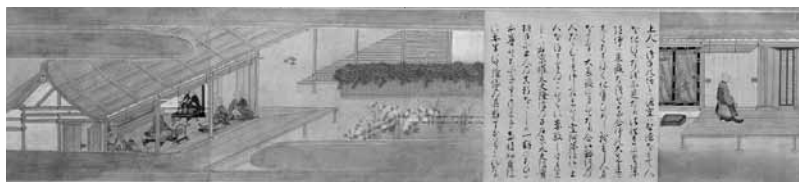


図3 『法然上人行状絵』 巻四十八第三段 知恩院



図5 法然上人像(隆信御影) 知恩院



図4 法然上人像(足曳御影) 二尊院



図7 法然上人像(信実御影) 知恩院



図6 法然上人像(鏡御影) 金戒光明寺



図9 法然上人像(鏡御影)
佛教大学附属図書館



図8 法然上人像(鏡御影) 清浄華院

えよう。そのような意味では、風呂敷包みという特定の図像があることによって「足曳御影」と認められることが理解され、風呂敷包みのない「法然御影の定型」に属する図様の多くは「鏡御影」に位置付けられてしまうという状況が見て取れるのではないだろうか。例えば、室町時代頃の制作と考えられる清浄華院本「鏡御影」〔図8〕は、若々しい相貌で、「鏡御影」成立の主題である法然頭の描写も頭頂部にごく浅いくぼみをつくるものの前頭部は丸みを持って表されるなど崩れもみられ、古写本である金戒光明寺本とは像容が異なる。法然御影の制作に際し、金戒光明寺本のような原本に近いものを写したとは考えにくい。また、同じく室町時代頃の作と考えられる佛教大学附属図書館本「鏡御影」〔図9〕では、極めて明快な頭部の平坦さがみて取れ、図様の主題を強調する意図をくみ取ることができる。

このような点は、あるいは法然頭が法然御影の定型として受容されていく中で、「鏡御影」の主題である法然頭自体が特別な特徴としての機能を失い、特定の系統を意図せず定型を採用し制作した御影が、「鏡御影」と称され伝来されていった可能性もあろう。つまり、法然御影の定型が、「足曳御影」よりも「鏡御影」を粉本として受容されていたことが考えうる。この点は、「足曳御影」の模本の少なさから流布した範囲の狭さが導かれるものと考えられるが、作品自体の調査がまだまだ足りず、現時点では課題として留意するに留めたい。

また、高間由香里氏によると「足曳御影」の頭頂部分が法然頭である点について、後世に改変されたものであると指摘し、「足曳御影」が実際法然を前にして描いた対看写照による寿像であるとも指摘している。その指摘から考えると、法然が実際に「法然頭」であったか否かという問題は、その定型の成立や「鏡御影」の逸話にも関わる問題ではあるが、本稿ではひとまず立ち入らないこととする¹⁰⁾。

さて、法然御影の系統の流布に関して、重要な契機として捉えるべき作例が知恩院本『法然上人行状絵図』（以下、

『行状絵図』である。よく知られるように、『行状絵図』は後伏見上皇の勅命により、知恩院第九世舜昌が徳治二年（一二〇七）から十年以上かけ制作したものと考えられている。法然伝を絵と詞書で図示する絵巻物であることから、法然の姿を最も多く描いた作例であることはもちろんのこと、流布している系統の御影に関する逸話が集められている点でも重要である。中井真孝氏が指摘するように、江戸時代の浄土宗僧である法然院忍激は『行状絵図』について法然伝の総修されたものとして高く評価していることが知られている。中井氏著書から忍激「御伝縁起」の該当箇所の現代語訳を引用すると、「舜昌は、法然の没後百年の人であつたが、『行状絵図』の編集に当たり、後代に属する人が作つた諸伝記をできるだけ避けて、直弟子たる「門人」が記した「師の行業」にろうとした。ここに舜昌の伝記作者として着眼点のすばらしさがあり、それがまた『行状絵図』の史料価値を高めているのだ。しかし一方で、門人の旧記は「実録」として尊重すべきだが、各自が知れることをのみ記して、内容に偏りがあり、脱漏する点も少なくない。所伝を通覧すればよいのだが、かなり面倒である。舜昌が諸伝を「総修」したことで、搜索する必要がなくなった」という。この評価は中井氏も述べるように現在の法然伝研究における評価と比べても大過ないものであり、法然の事績をうかがうに最適といえよう。

この『行状絵図』以前にも、『本朝祖師伝記絵詞（伝法絵）』（現存せず、嘉禎三年…一二三七）の室町時代頃の写しである善導寺本や、常福寺本『拾遺古徳伝』（承安三年…一二〇一）などにも「二相對面」や「隆信御影」、「頭光踏蓮御影」に関する絵詞が存在するものの、『行状絵図』では、「鏡御影」、「信実御影」などを含む集成的な位置付けが出来る。むしろ、「足曳御影」などの逸話が集積されていない点なども留意すべきだが、諸系統の御影制作時点において既存の法然伝を参照し作りあげられたことは疑いなく、以降の御影の粉本としても重要であつたことが考えられる。

では、本稿で取り上げようとする「宝瓶御影」はいかがであろうか。「宝瓶御影」の遺例は決して多くなく、現存作例も南北朝・室町時代を遡りえないと考えられる。『行状絵図』に関連事項は記されるものの、その図像成立は『行状絵図』の完成以降である可能性が高いものと考えられる。また、後述のように「宝瓶御影」は立像形式であるが、法然御影のなかでは比較的古く、立像形式の法然御影の古本としても注目すべきであろう。項を改め、「宝瓶御影」の作例について観ていきたい。

第二章 宝瓶御影について

第一節 宝瓶御影の作例について

「宝瓶御影」は、頭光を表す頭上に宝瓶を載せ、胸前で数珠を手繰り、頭体をやや左に向け素足で踏割蓮華上に表された立像の御影である。法然が勢至菩薩の化身であることを、頭上に勢至菩薩の図像的象徴である宝瓶を載せることで表現した法然御影の一系統であり、宝瓶を載せることで端的にその図様の意図を表現し得ている。

このような「法然本地身としての勢至菩薩」という信仰の成立基盤は、その生前から周辺において認知され、さらに周知されていったものと考えられ、法然の幼名が勢至丸であったことや「智恵の法然房」と称されていたこと、三井寺公胤が夢告で法然の本地が勢至菩薩であること伝えること、親鸞の著作である『浄土和讃』末尾において「已上大勢至菩薩、源空聖人御本地也」と明記していることなどから導かれる。その後法然の往生に至り、勢観房源智周辺による知恩院勢至堂勢至菩薩坐像〔図10〕（以下、知恩院像）の造立をはじめとして法然と勢至菩薩の関係を明確に示す造形が規範化されていったものと考えられる。それは、金戒光明寺、清浄華院、知恩寺な



図10 勢至菩薩坐像 知恩院勢至堂

の信仰のものであることは特に注目してよい。知恩院像は、まさに現存最古例の「浄土宗美術」であると位置づけることが出来るだろう¹³⁾。この知恩院像を根本像とする浄土宗における一連の勢至菩薩像について、独尊で表された稀有な系譜と考えることから、本稿では独尊勢至菩薩像と呼称する。

その像容は、合掌し結跏趺坐する坐像で表され、当時主流であった立像、あるいは腰を浮かせて膝をつくものなど、阿弥陀三尊の脇侍としての形式とは異なる点は留意され、本尊仏としての威儀を整えることが意図された像容と考えられよう。しかし、この独尊勢至菩薩像と「宝瓶御影」が大きく異なる点は注目される。つま

どの四箇本山にも、知恩院像の模刻と考えられる勢至菩薩像の存在が確認されることから理解できるだろう。知恩院を始めとする四箇本山に伝来する勢至菩薩像については、村上佳濃氏によって紹介されている¹²⁾。知恩院像は十三世紀中頃の慶派仏師による制作と考えられる特徴を有しているが、天衣と条帛が背面で交差するなどの特徴的な形式が他の四箇本山諸像にも採用されていることから知恩院像を根本像とする模刻が行われたと考えられている。このような系譜は、法然本地身たる勢至菩薩像に対する信仰として、浄土宗独自

り、胸前で数珠を手繰る立像形式の像容を示す「宝瓶御影」が成立する際に、なぜ法然の本地として制作された由緒正しい根本像たる知恩院像のように合掌坐像の独尊勢至菩薩像を範として制作されなかったのか、という疑問が生まれるであろう。

先に概観した法然御影の系統では、「足曳御影」（二尊院蔵）をはじめ、「鏡御影」（金戒光明寺蔵）、「隆信御影」（知恩院蔵）ほか、法然生前に描かれた寿像としての逸話を持つ多くの御影の系統が坐像であり、立像は「信空御影」（金戒光明寺蔵）や『法然上人行状絵図』に表された法然像など、古例に属するものとしては比較的少ないことが窺われる。

ここではまず、現存する宝瓶の御影について確認しておきたい。

宝瓶御影には、御影展に出陳頂いた室町時代（十五世紀）に制作されたと考えられる知恩院本「図11」と、それを遡る作例として、南北朝頃（十四世紀）と考えられる十輪寺本「図12」が挙げられる。従来、古例に属す宝瓶御影として知られている作例はおよそこの二例であるといつてよい。

また、知恩院本には認められないものの、先行する十輪寺本には本紙上部の頭光周縁部に讃が記されている。引用すると、

法然本地身大勢至菩薩

為度衆生故顕置此道場

我每天影向擁護

帰依衆必引導

極楽若我此願

念不令成就者

永不取正覺

讃州小松庄

生福寺銘文上人

造勢至菩薩造自造書之文

建暦元年（未辛）十一月廿日法然

とあり、後半（八行目から）の銘から、いわゆる建永の法難によって配流されていた讃岐国（香川県）小松庄生福寺において、法然自らが勢至菩薩像を造立した際の願文であることがわかる。銘にいう法然による勢至菩薩造立の真偽はさておき、この銘文からは、宝瓶御影は地方における法然の配流に関する法然伝から成立したこと、自らが本地身たる勢至菩薩像を造立したという逸話を生んでいたことが窺われる。法然の生涯において美術作品との積極的な関わりが見出されないことから、前半も自らが記したとは考えにくい内容であるが、末尾の建暦元年十一月二十日は讃岐からの帰京の日にあたることとがすでに指摘されている。知恩院本に同様の讃文が認められる点についても系譜的な疑問が残るものの、勢至菩薩造立の逸話から「宝瓶御影」図様が生まれたとみられる点はその有機的な関係性からも疑いないだろう。

「宝瓶御影」は、その成立について『行状絵図』において触れられていない。しかし、古本である十輪寺本の銘を参照すると、法然配流から帰京の折りに成立した逸話を伝え、『行状絵図』でも、関連する記述が認められる。



図12 法然上人像(宝瓶御影) 十輪寺



図11 法然上人像(宝瓶御影) 知恩院

例えば、「鏡御影」該当箇所である巻八第七段「鏡の御影并勢至円通の文を賛に用ひ給事」¹⁸⁾詞書には、法然が鏡御影に『首楞嚴經』『勢至円通』の文を書き記したことについて述べ、法然が勢至菩薩の応現であることが世間的に広く知られているという。続けて、

（前略）讃州生福寺にすみ給し時は、勢至菩薩の像を自作して、「法然本地身、大勢至菩薩、為度衆生故、顕置此道場」（等）、置文に載られける、委事は彼配所の巻に記すもの也。勢至の垂迹たる条、その証拠かくのごとし。尤も仰信するにたれり。

という。文中にある「配所の巻」は、『行状絵図』巻三五第二段にあたる。該当部分を参照しておきたい。

讃岐国子松庄におちつき給にけり。当庄の内生福寺という寺に住して、無常のことはりをとき、念仏の行をす、め給ければ、当国近国の男女貴賤、化導にしたがうもの市のごとし。（中略）かの寺の本尊、もとは阿弥陀の一尊にておはしましけるを、在国のあひだ脇士をつくりくはへられけるうち、勢至をば上人みづからつくり給て、「法然本地身、大勢至菩薩、為度衆生故、顕置此道場、我每天影向、擁護帰依衆、必引導極楽、若我此願念、不令成就者、永不取正覚」とぞかきをかれける。勢至の化身として、みづからその体をあらはしなおり申されける、まことにいみじくたうとき事にてぞ侍ける。

このように、阿弥陀仏が独尊で祀られていたが、脇侍である勢至菩薩を法然自ら彫刻し、自らが化身として影

向すると述べる。「宝瓶御影」は、勢至菩薩の化身であることを示すのみならず、逗留地を去った法然が、その地の衆生のために影向したお姿を描いたものであり、同様の機能が期待され制作されたものであるといえるだろう。十輪寺・知恩院本はともに、左右両端に余白を作らず極端に縦長な本紙画幅の寸法も近似し、¹⁹⁾ いずれも肉身の輪郭を細く繊細な筆致で描き、著衣を太目で柔らかい描線にて表す。特に知恩院本にその傾向が強い。図像に関しても、十輪寺本が経年によって表情などが読み取りにくくなっているものの、細部まではほぼ同様に表されており、謄写されたものと見られる。わずかに、頭頂部のいわゆる「法然頭」が十輪寺本では柔らかな筆致によってやや窪みを設けるのに対し、知恩院本では輪郭線を仔細に追うと湾曲を作ってはいるものの、ほぼ直線に近い扁平なものになっている点で相違がある。

また、調査を続けるにあたり、従来あまり知られていなかった「宝瓶御影」系統の作例を知ることができた。項を改めて、その紹介と図様についてみていきたい。

第二節 西念寺蔵「水鏡御影」について

香川県仲多度郡に所在する仲津山西念寺は、先述の法然配流時における逗留先として知られる小松庄生福寺の地に所在する浄土宗寺院である。

『全讃史』四卷上²⁰⁾には、

建永二年法然配流讃州、寓止於那珂郡子松郷、建寺曰生福寺為念仏三昧道場、而天正中罹兵火、只弥陀善導像存焉、皆上人所親刻也、寛文八年英公移其本尊於此地、大加修造号仏生山来迎院法然寺、又山上築邦世々

夜台日般若台傍宮来迎堂其他二尊堂三仏堂文殊樓仁王門韓門四天門四脚門鐘樓十王祖師堂、僧房香積寮不遑枚挙也、寺領三百石

とあり。生福寺は天正年間に兵火のために焼け、阿弥陀・善導像だけが残ったとされ、寛文八年（一六六八）に松平頼重公によって移転せられて、現在の仏生山来迎院法然寺が建立されたことが記されており、その移転の後に、跡地に西念寺が再興されたものと考えられる。

天正期に焼け残ったという阿弥陀・善導像の所在は不明ではあるものの、西念寺には極めて興味深い「宝瓶御影」に連なる法然上人像が伝来している。⁽²¹⁾従来知られることのなかった新出作例である。

寺伝名称では、「水鏡御影」「図¹³」と称されるもので、同寺に伝来する『御水鏡縁起』⁽²²⁾によれば、

抑々此の御厨子の中に秘蔵し奉るは法然

上人御直筆の水鏡の御影なり、其由来を尋

ぬるに昔上人念仏門開宗の当時より、当国の

衆生を済度せんと志を立つる事年久し、

偶々建永二年当国に遷流せらるゝに及び、其

宿志を遂ぐる事を得たりと大ひに喜び玉ひ

勢至菩薩の応現として旺んに弥陀本願

の深旨を述べ給ふ、衆之を聞き大ひに悦服

し、真仏の如き思ひをなし、敬慕して止まず時
恰も大早魃にして四月より六月下旬に至る迄
一滴の雨なく苗は既に枯死せんとし田植する
事能はずして大ひに之を憂ふ、特に上人に
雨乞を請ふに如かずと上人請を入れて忽ち
念仏三昧に入り給ふに天油然として雲を起
シ沛然として雨を降らし車軸の如し依て田



図13-1 法然上人像(水鏡御影) 西念寺



図13-2 上半身部分

植えする事を得し衆皆大ひに之を喜ぶ、然るに其年十月天長の召に応じ京畿に販り給はんとする也、衆皆深く其離別を悲しむ、特に上人清浄なる蛇淵の水に御自身の姿を写し之を画き給ふて当山に記念として残り給へり御影頭上勢至菩薩の宝餅現れ玉ふ、謹んで拝礼を遂げられませう

という。文体から見てもさほど古体を示さず、写しと想定してもその原本自体の成立が古くないことを窺わせる。西念寺本は、寺伝では配流先である讃岐から帰京に際して遺されたものとして伝わっており、十輪寺本上部に記された銘の内容を踏襲している事が窺われる。十輪寺本の銘文の真偽については問題も残されているが、制作年代や成立背景に大きな相違があるものの、やはり「宝瓶御影」という図様の成立に讃岐地方における事績が影響している可能性が強いと考えられるよう。

その図様は、本紙上部の余白を大きく取り、下部に頭上に宝瓶を載せ、墨衣を著し、合掌しながら身体を右に向け立つ法然上人像を描く。宝瓶とそれを載せる蓮台は金泥にて描かれ、唇には朱が入り、沓は金泥で唐草文を描く。肉身の描線は細く、著衣・沓は太い描線で描き、衣の上半身などは大らかで緩やかな運筆で、広がりを見

せる裾の部分では筆の走る闊達な描線がみられる。表情は明快で柔らかなみのある曲線によって朗らかな笑みを浮かべており、全体に作者の優れた技量がみられる優品である。絵絹は目の詰まった良質なものであるが、制作は江戸時代後期（十八世紀頃）辺りに位置付けられようか。

この西念寺本の最大の特徴は、十輪寺・知恩院本の両手が胸前で数珠を繰るのに対し、西念寺本は左腕に数珠を掛け、手は合掌手に表す点であろう。基本的には十輪寺・知恩院本の影響下にある西念寺本であるが、勢至菩薩の化身としての法然像が合掌しないという点に疑問がもたれたのか、合掌するという勢至菩薩に親近性を持つ図像改変が行われている。より整合性を持たせた宝瓶御影系統を生んでいる点で極めて興味深い作例である。また、相違点という点では、手印以外にも認められる。先述のように十輪寺・知恩院本は頭光を表し踏割蓮華上に立つという姿で表されるが、西念寺本では頭光がなく、沓を履き虚空上に立つ姿である点は「宝瓶御影」成立時に期待された本来の意図がすでに失われている可能性があるだろう。

「宝瓶御影」に求められた機能や意図という点についても留意しながら、図像の成立について考察を加えたい。

第三章 宝瓶御影の図像選択について

御影展では室町時代頃の作例と考えられる知恩院本「宝瓶御影」、知恩院像を根本像として江戸時代頃に模刻したとみられる清浄華院所蔵勢至菩薩坐像〔図14〕をご出陳頂いたが、ともに法然と勢至菩薩との関係を視覚的に表現したものであるにもかかわらず、その特徴は一見して異なる点が多い。

先にも触れたように、「宝瓶御影」が法然と勢至菩薩を本地垂迹関係であることを表す図様であることは、頭



図14-1 勢至菩薩坐像 清浄華院



図14-2 背面

上に宝瓶を載せることでの確に表現されているといえるが、なぜ知恩院勢至堂に安置されている法然本地身としての独尊勢至菩薩像を倣い、合掌・坐像という姿勢をとらなかったのであろうか。現存遺例から見るかぎりでは創出の時期としては南北朝期を遡らないが、「宝瓶御影」の制作にあたつて通用の法然御影の定型をとらず、立像形式を採用した意図や機能として何が期待されたのであろうか。成立背景に、法然配流地との関わりが顕著に見出されることはすでに触れたが、それぞれの逸話に内包される、地方における布教と法然自身に集まる信仰という点は浄土宗における祖師信仰の形成期にあつて重要な要素といえるだろう。

また、その図様を見ると、恐らく「宝瓶御影」作者は知恩院像の像容に触れていなかった、あるいはあえて選択しなかったものと考えられる。では、「宝瓶御影」制作にあたつて、何を規範として制作したのであろうか。

この疑問について考える上で極めて重要な例が、「頭光踏蓮御影」〔図15〕であろう。

「頭光踏蓮御影」は月輪殿から退出の時、法然は頭から光を放ち、足元には蓮華を踏んでいた姿を九条兼実が感得したとして伝わるものであり、善導寺本『伝法絵』や妙定院本『法然上人伝絵詞』、常福寺本『拾遺古徳伝絵』ならびに『行状絵図』など、法然没後、比較的早い頃から各種法然伝において集録されている。頭光も蓮台も、仏菩薩の象徴であることは言を俟たず、法然が示した奇瑞を表す図様である。なお、善導寺本の「頭光踏蓮」該当部分では、頭光を表すのみで蓮華を踏んでいない点に留意したい。詞書にも、

元久二年乙丑四月一日、於月輪殿、浄土の教籍、御談数剋之後、御退出之時、遙に南庭をおハしましける御うしろに、頭光を現し給ければ、禪定殿下、くつれおりさせ給て、稽首帰命したてまつりて、悲涙千行万行。



図15 『法然上人行状絵図』 巻八第五段 知恩院

とあり、成立の早い法然伝では、頭光のみ表され、さらに聖性を付与する意図のもと、後世に蓮華を踏む図様を加えられた可能性が高いと考える。

各種法然伝では、他にも法然が念仏によって表した奇瑞が散見されるものの、この「頭光踏蓮」の奇瑞については、御影展図録の概説でも触れたが、法然自身の聖性を強調したものとして特に注目してよい。九条兼実が感得したとするこの逸話は、帰依深い兼実の徳を讃えたものとしても捉えることができる。

また、立像形式という点に着目すれば、興味深い作例に「信空御影」が挙げられるだろう。「信空御影」は金戒光明寺に古本が認められ、その写しと考えられる室町時代頃の福泉寺本「図16」がある。また、同系統と考えられる「法然上人像(伝狩野元信筆)」が法然院にも伝来している。金戒光明寺本の本紙右側に記される銘文によれば、法然四十三歳のときに善導大師の『観無量寿経疏』によって専修念仏の行者となり、信空が日夜常随してその尊影を描いたと記し、本紙左側には信空の銘と花押が記されることからその名がある。興味深いのはその図様で、立像形式の法然を描き、左向きで合掌する姿をとる点であろう。数珠は合掌した両第一指に掛け体部と両手の間に



垂らしている。さらに、頭光がなく蓮華を踏まない点も立像形式の法然御影のなかで注目すべき点である。このような点は、むしろ西念寺本に近い特徴を有していると考えられ、西念寺本における図様変更に際して影響を与えているとも考えられる。金戒光明寺本については実見調査を経てもらず不明な点もあるが、写しとみられる福泉寺本については補修も多いが室町時代頃の制作と考えられ、「宝瓶御影」が制作された時期と近い。合掌立像形式の「信空御影」という図様が存在するにもかかわらず、あえて「頭光踏蓮御影」の図様を参照したという経緯も想定されるだろう。

『行状絵図』には法然が顕した奇瑞が多数掲載されているが、「頭光踏蓮御影」は夢中において善導と逢う「二祖対面御影」と並び、法然の聖性を主張する重要な奇瑞であることは周知の通りである。「宝瓶御影」の古本である十輪寺本の制作時期が南北朝期にあたる点についても、新たな御影の系統が創始される時期として、南北朝から室町という時代は第七祖聖岡・第八祖聖聡などによって浄土宗における改革、組織化が図られた時期にもあたり、御影に期待された機能を思い返すと、祖師信仰の形成に際して元祖たる法然の性格が再構築されていく中で大きな役割を担ったものと考えられる。そ

のような運動の中で、法然の聖性を顕著に示す図様が求められたことは想像に難くない。

そのような意味では、宝瓶を頭上に載せることで勢至菩薩の化身であることを端的に表現し得ていることを思えば、法然自身が顕した「頭光踏蓮」の奇瑞をそれに加えることで、法然の聖性はより高められたこととなろうか。独尊勢至菩薩像が示すような合掌坐像の御影は現存作例には認められないことからあえて大きく逸脱した図様を採用せず、新たな系統を生む際には既存の作例に依拠して制作されていたと考えられる。「宝瓶御影」の図様は、まさに法然が聖なる存在であることを衆生に示す機能を期待され生み出された御影であるといえるだろう。



図16 法然上人像(信空御影) 福泉寺

先述の善導寺本が蓮華を踏まず、その後の法然絵伝には蓮台の図様が加えられるようになったことは、「頭光踏蓮」図像の成立も同様の意図と機能が求められた可能性が高いと考えられるであろう。

おわりに

これまで、数ある法然御影のなかでも特徴的な図様を示す「宝瓶御影」について、特に図像成立の問題について検討してきた。

「宝瓶御影」は、勢至菩薩の化身たる法然の姿を描くにもかかわらず、その根本的存在である知恩院勢至堂勢至菩薩像をはじめとする独尊勢至菩薩系統の形姿を採用せずに数珠を手繰り立ち姿で表されている。それは、「頭光踏蓮」という各種法然伝などに採用され認知度の高い法然自身が表した奇跡の表現で図様を構成することによって、その聖性をより高める意図があったものと考えられた。

また、この度の調査で西念寺蔵「水鏡御影」が見出され、その存在が知られたことは望外の喜びであった。本稿で問題としていた、勢至菩薩の象徴である宝瓶・合掌という形式を具えていたからである。後世においては、本稿で取り上げた疑問を解消するかのような改変をみせる事例が知られたことは極めて興味深いものと考えられる。しかし、その改変も、「信空御影」などの既存の図様から援用された可能性もあり、今後の課題として留意しておきたい。西念寺本が頭光踏蓮を表さない点については、やはり「宝瓶御影」に求められていた本来の意図からは外れているといえようが、讃岐配流の中にあつて、人間法然に触れていたその土地の人々が継承していった伝承のなか生み出された特別な図様であるということができらるだろう。

さらに、「宝瓶御影」を考える上では、知恩院勢至菩薩坐像を根本像とする一連の独尊勢至菩薩像の系譜とその信仰についても併せて検討する必要があるだろう。先にも触れた四箇本山に伝来する独尊勢至菩薩像はそれぞれ制作年代が異なると考えられるが、浄土宗における祖師信仰の形成と広がりを理解するために重要な指標となるのではなからうか。また、「宝瓶御影」は法然配流における事績を背景に成立していることが窺われたが、独尊勢至菩薩像の造像は「宝瓶御影」に遡り、京都を中心に成立している。従来知られている四箇本山諸像以外にも独尊勢至菩薩像の存在を確認しているが、更なる調査を経て法然本地身としての独尊勢至菩薩像に対する信仰圏の問題を明らかにしていく必要があるだろう。

法然と勢至菩薩の関係を説く媒体としての独尊勢至菩薩像と「宝瓶御影」のふたつの系譜は、浄土宗における祖師信仰のひとつの形として極めて重要なものと考えており、今後も調査を続けたい。

もとより、本来法然御影について一考を被覧する立場になく、理解に誤りもあるうかと思われる。しかし、展覧会の開催に際してご協力賜った関係各位に対する学恩に学芸担当者として報いるため、調査の過程で得た知見をまとめることを思い至った。識者のご叱正を心から請うとともに、資料を紹介することで御影研究のさらなる進展の一助となれば幸いである。

キーワード…法然、御影、勢至菩薩、浄土宗美術

〈注〉

(1) 「展覧会概要」

展覧会名…「法然上人の御影―お姿ものがたり―」

開催期間…平成二十六年五月十八日(日)―六月二十一日(土)

会場…佛教大学宗教文化ミュージアム第一研究成果展示室

関連講演会…「法然上人の御影について」

講師 成田俊治氏(佛教大学名誉教授)

平成二十六年五月二十五日(日) 十四時三十分

なお、同展図録には「概説 法然上人の御影―お姿ものがたり―」として、七系統の御影とその逸話についてまとめ紹介している。

『法然上人の御影―お姿ものがたり―』(佛教大学宗教文化ミュージアム、二〇一四)

(2) 前掲注1 関連講演会配布資料

(3) 井川定慶「法然上人影像と其の伝説の種類」(『藝文』一七(五)、一九一五)

望月信成「法然上人の御影」(『美術研究』七九、一九三八)

井川定慶「法然上人の御影考」(『日本古代史論集』、吉川弘文館、一九六〇)

望月信成「法然上人像について」(『浄土学』二八、一九六一)

(4) 成田俊治「法然上人の御影」(総本山知恩院、二〇一一)

成田俊治「法然上人の御影について」(佛教大学総合研究所編『法然仏教とその可能性 法然上人八〇〇年大遠忌記念』、

佛教大学、二〇一一)

(5) 高間由香里「画像解析による法然上人御影の考察」(『印度学佛教学研究』六〇(一)、二〇一一)

同「御影に見る浄土宗祖师信仰発展の過程」(『仏教文化研究』五八、浄土宗教学院、二〇一四)

(6) 御影に関する極めて重要な成果として挙げられるのが、『法然上人行状絵図』(国宝、知恩院蔵)のデジタル化事業である。また、東京国立博物館では特別展「法然と親鸞―ゆかりの名宝―」が、京都国立博物館においては特別展「法然―生涯と美術―」および、仏教美術研究上野記念財団主催による「浄土宗の歴史と美術」が開催されるなど、法然ゆかり

の作品や背景についての研究が活発化したといえよう。

『法然—その生涯と美術—』（京都国立博物館、二〇一一）

『法然と親鸞—ゆかりの名宝—』（東京国立博物館、二〇一一）

『浄土宗の文化と美術』（仏教美術研究上野記念財団、二〇一一）

（7）前掲注4成田「法然上人の御影について」

（8）本稿において作例の左右を述べる場合、特に断らない限り画面に向かつての左右として記述する。

（9）前掲注5高間「画像解析による法然上人御影の考察」では、「足曳御影」の頭部の輪郭線について、「（前略）頭頂部にだけ淡墨の広がりが見られることから、制作当初の輪郭線を一旦水で薄めて消し、額の上部分を持ち上げ、頭頂部を凹ませるように輪郭全体を修正した痕跡と見做される。」として、「後世のある時期、いわゆる「法然頭」の形状に意図的に改変した」とする見解を示している。また、同「御影に見る浄土宗祖師信仰発展の過程」において、施主に逸話通り九条兼実を想定し、建永二年（一二〇七）の法然土佐配流の旨が下った後に、法然を偲ぶために急遽宮廷周辺画家に依頼し制作された作例として指摘している。

（10）前掲注5高間「御影に見る浄土宗祖師信仰発展の過程」において、法然頭について触れる最も古いものとして、『元亨釈書』（元亨二年（一二三二））を挙げている。同書には「頭圩而稜」と記され、完成以降、十六世紀から十七世紀半ばにかけて盛んに刊行されていることを指摘している。「鏡御影」の流布に関して傾聴すべき見解である。

（11）中井真孝「法然絵伝を読む」（アジア宗教文化情報研究所、二〇〇五）

（12）村上佳濃「法然教団の勢至菩薩像について」（『美術史研究』第四七冊、二〇〇九）

（13）「浄土宗美術」という概念は、大原嘉豊氏が提唱したもので、「浄土宗の教義を表現した仏教造形を指す」ものである。法然在世時に流布していたと考えられる「撰取不捨曼荼羅」は他宗の弾圧により棄却され現存せず（転写本として、クリーブランド美術館所蔵『融通念仏縁起絵巻』下巻第十段が伝わる）、善導の『観無量寿経疏』所収の「二河譬」を浄土教徒が布教のため図示化した「二河白道図」も現存作例は法然在世時から十三世紀頃に遡り得ない。このような意味で、十三世紀中頃の制作である知恩院勢至堂勢至菩薩坐像が、浄土宗における「法然本地身としての勢至菩薩」という

独自の教義・信仰によって制作された現存最古の浄土宗美術として位置付けられるものと考えている。

大原嘉豊「浄土宗美術論」(前掲注6『法然』所収)

(14) 三宅久雄「来迎する姿かたち」(『日本の美術』四五九「鎌倉時代の彫刻―仏と人のあいだ―」、ぎょうせい、二〇〇四)

(15) 知恩院本には、いくつかの裏書が認められる。上部から記すと、

① 「天部中央辺裏書」

法然上人撰法廟御影

② 「本紙上段裏書」

安養院誠誉遺物之

知恩院三十二代雄誉(花押)

寛永十八年三月十八日

③ 「本紙下部下段右側裏書」

奉寄進給処施主仁者油断小路

通上金佛町之五十川茂兵衛殿也

為父福岸宗徳禅定門菩提也

為母功運妙栄禅定尼菩提也

為六親菩提殊^{二八}、自身現世安穩

後生清浄土 敬白

寛永十三年

当寺^以到来之年号

三月廿一日

④ 「本紙下部下段左側裏書」

下京之内左目井通泉水町

安養院永代之住物也

当寺中興深蓮社誠誓風長上人(花押)

寛永十七年 辰

六月廿五日

⑤「地部裏書」

享保三年^{戊辰} 修補

崇泰院(印)

靈雲院(印)

九勝院(印)

九間院(印)

とある(銘文は適宜常用漢字に改めた)。①には、「撰法廟御影」とあるが、これが何を指したのか詳らかでない。撰法廟は「附属の廟」というような意味と取れるが、御影堂に対する勢至堂を指しているのであろうか。あるいは、御廟と勢至堂を指すとみるのが自然であろうか。③には、寛永十三年(一六三六)五十川某を施主として寄進されたとあるが、本作例が十七世紀に降るとは考えにくく、譲渡等に関するものであったかと考えられる。寛永十三年以前の伝来が不明ではあるものの、④には「安養院永代の住物なり」とあり、少なからず安養院所蔵であったことが想像される。⑤は享保三年(一七一八)の修補に関するもので、崇泰院、靈雲院、九勝院、九間院は、「華頂誌要」によれば、いずれも知恩院黒門より三門に至る塔頭支院の旧名であると考えられる。

『浄土宗全書』第一九卷「華頂誌要 華頂山編」(浄土宗宗典刊行会編、一九一三)

(16) 十輪寺は、兵庫県高砂に所在する西山浄土宗寺院である。配流の途中で法然が念仏を説いたゆかりの地である。本稿でも触れているように、法然配流時の布教と宝瓶御影の普及は関連性が見出されるものと考えられる。

(17) この点については、『法然と親鸞』展図録の作品解説で指摘されている。

瀬谷愛「法然上人像(宝瓶御影)」(『法然と親鸞―ゆかりの名宝―』、東京国立博物館、二〇一二)

- (18) 本稿で引用する『行狀絵図』詞書については、特にことわらない限り、中井真孝校注『新訂 法然上人絵伝』（佛敎大学宗教文化ミュージアム、二〇一三）を参照させて頂いている。
- (19) 十輪寺本…本紙縦一二・五・二 横四〇・七（単位はセンチメートル、以下同）
知恩院本…本紙縦一二・二 横三九・五
- (20) 中山城山、青井常太郎『標註国訳全讀史』（藤田書店、一九三七）
- (21) 基礎データについて記述しておく。
法然上人像（水鏡御影）
品質構造…絹本著色・金泥
本紙…縦八四・三 横三五・七
- (22) 『御水鏡縁起』は卷子装で、年記等は見当たらないものの、近代に古本を写したものと見られる。史料の読みには柿本雅美氏（本館ボストドクター）の協力を得た。
- (23) 三田全信『成立史的法然上人諸伝の研究』（平楽寺書店、一九六六）
中井真孝編『善導寺蔵『本朝祖師伝記絵詞』本文と研究』（佛敎大学アジア宗教文化情報研究所、二〇〇七）
中井真孝編『妙定院蔵『法然上人伝絵詞』本文と研究』（佛敎大学アジア宗教文化情報研究所、二〇〇八）
中井真孝編『常福寺蔵『拾遺古徳伝絵』本文と研究』（佛敎大学宗教文化ミュージアム、二〇〇九）
- (24) 善導寺本詞書については、前掲注21中井真孝氏の翻刻に拠り引用した。
- (25) 前掲注1『法然上人の御影』
- (26) 金戒光明寺本については、前掲注4成田『法然上人の御影』に詳しい。

〔付記〕

本稿を成すにあたり、清浄華院、知恩院、福泉寺、佛敎大学附属図書館をはじめ、ご所蔵者様には調査および図版使用につ

いて快諾頂いた。特に西念寺瀧口信行御住職にはご厚情を頂き、調査にあたり格別のご配慮を賜った。また、御影展講演会の講師としてご出講頂いた成田俊治先生には、不学な筆者に法然上人の御影について懇切にご教示賜った。佛教大学附属図書館古川千佳氏には、展覧会の度にお手を煩わせ、資料についても様々な事を教えて頂いた。末筆ながらご協力賜った皆様方に深甚の謝意を表したい。

〔図版出典〕

図2・4・6、『法然と親鸞―ゆかりの名宝―』（東京国立博物館、二〇一一）
図10、坪井俊映ほか著『古寺巡礼京都16 知恩院』（淡交社、二〇〇七）